

ポーの町のNGOで編物を習う女の子たちは、かつて村から連れ去られ、軍隊で働くことを余儀なくされた©UNICEF/Sierra Leone



シエラレオネ 主要データ

国名：シエラレオネ共和国
面積：約7万1,740平方キロ（北海道ほどの大きさ）
人口：476万4,000人（2002年）
首都：フリータウン
5歳未満児死亡率：284 / 出生1,000人中（2002年）
<5歳未満児死亡率の順位1位>
国データは主に「世界子供白書2004」による。



地図は参考のために掲載したもので、国境の法的地位について何らかの立場を示すものではありません。

が運営するストリート・チルドレンのための一時保護施設に入ることができましたから」

社会保障省の職員であるマリアマの仕事は、ケネマ地域で適切な保護を受けられないでいる子どもたちにケアを提供すること。そうした子どもたちを見つければ、まずインタビュートカウニング、必要な場合には健康診断を行い、家族や親戚などを探し出します。すぐに引き取り手が見つからない時には、アミナタのケースのようにNGOの一時保護施設に連絡することも。

但し、あくまでも子どもにとって適切な保護環境におくこと。別の言い方をすると、子どもが家族に代わる適切な「保護者」のもとで生活できることに重点を置いていきます。

こうした「子どもの保護」のためのプロセスは、2003年、ユニセフと社会保障省の協力のもとに策定されました。10年に及ぶ内戦の結果、既存の社会システムが崩壊してしまったこの国で、ユニセフは政府とともに全国的な子どもの保護のための社会保障制度を再建しようとしています。ユニセフの目標は、本格的な戦後復興へ向けて、2007年までにシエラレオネのすべての子どもが適切な保護を受けて暮らすことができるよう、行政及び司法制度を整備することです。

その第一歩として、2004年6月、ユニセフは社会保障省のすべてのソーシャル・ワーカー約160名に4週間のトレーニングを行い、子どもの権利についての基本的知識、警察及び司法当局との連携のあり方、ジェンダーの視点（特に女の子に対する特別な配慮）の重要性、さらには報告書の作成方法などを教えました。「トレーニングは非常に実践的で、毎日の仕事に役立っているんですよ」とトレーニングの成果を調査しに訪れた私に対し、マリアマは自信を持って答えてくれました。

現在、シエラレオネには、都市部を中心にアミナタのように政府の保護を必要とする子どもたちが2,500人以上いると推定されています。ユニセフ

行かせるどころか、毎日、早朝から夕暮れまで畑仕事を手伝わせたのです。父親という働き手を失ったアミナタの家庭にとっては、それは当然の成り行きだったのかも知れません。しかし、紛争後の平和な暮らしを夢見ていたアミナタにとっては、あまりにも過酷な現実でした。「本当は学校に行きたかったから、お母さんの所に戻ったんだけど、いつも慣れない畑仕事ばかりさせられて…。仕事がつらくて、それで家を逃げ出したんです」

こうして、行き場を失ったアミナタが2004年初めに実施した調査では、ケネマだけでも122人のストリート・チルドレンがいます。そのうち約1割にあたる10名は、アミナタのような女の子です。そうした子どもたちに共通するのは、紛争の影響で家族やコミュニティの保護が受けられなくなったこと、そして、その多くが犯罪の加害者や被害者になっているという事実です。

例えば、私が定期的にモニタリングのために訪れるフリータウンにある少年拘留所には、常時20数名の男の子が拘留されています。そのうち約7割が元子どもの兵士、すなわち、かつて戦闘に加わった子どもたちです。彼らは様々な事情で家庭やコミュニティに溶け込むことができず、次第に路上をさまようようになり、窃盗など犯罪に手を染めるようになりました。こうした言わば社会から疎外されてしまった子どもたちをどのように保護していくのか、そのためにどのような制度や仕組みを築いていくのか。今後、ユニセフが政府やNGOと共に取り組むべき大きな課題です。

シエラレオネの内戦は、人々の手足を切り取るという残酷さで世界的に知られるようになりました。しかし、戦争はそれだけではなく、家族やコミュニティ、そして社会のネットワークをも断ち切ってしまった。その影響を最も深刻な方たちで被っているのは、アミナタのような弱い立場にある子どもたちです。「かつてシエラレオネには

Profile プロフィール



根本 巳玖さん
(ねもと みお)

東京大学法学部卒。米国シラキュース大学・マックスウェル・スクール大学院で公共行政管理学、及び、国際関係論の両修士号取得。日本ユニセフ協会（ユニセフ日本委員会）で広報・渉外担当官として勤務。その後、ユニセフ駐日事務所コンサルタントを経て、2004年3月より現職。

は、ケネマ市内の路上で生活するようになりしました。いわゆる、ストリート・チルドレンです。「私たちが街でアミナタを見つけた時、彼女の所持金はわずか1,000レオン（約0.36米ドル）でした。パンを3切れ買えば、それでお願いします。あとは、市場で物乞いをしたり、山の麓で取れるマンガローを食べて生き延びていたようです」

「ソーシャル・ワーカーのマリアマ・マンセレーは話します。「でも、彼女はラッキーでした。犯罪などに巻き込まれる前に、ユニセフの支援を受けたNGO

拡大家族の考え方が生きていました。その根底にあるのは、肉親だけでなくコミュニティ全体で子どもたちを育てていくという発想です。でも、長い間続いた内戦とそれに引き続く経済的な困窮の中で、街に暮らす人々にはその余裕がなくなっているのが気がかりです」

マリアマは私に率直に嘆きます。今、アミナタは、NGOが提供する機織りのトレーニング・コースに参加しながら、新しい家族が見つかるのを待っています。嬉々として機織りに勤しむアミナタを見てみると、内戦の記憶は遠く昔のことのような錯覚を覚えます。内戦時のことや路上での生活について、アミナタは多くを語ろうとはしません。しかし、その影響は見えないところでまだ確実に残っています。家族のもとに戻りたいと願う子どもたち。もう一度学校に通うことを夢見る子どもたち。そうした子どもたちの希望をひとつでも多く叶えることができたら…。フリータウンへ戻るヘリコプターの中で、私は思いました。

アフガニスタン緊急・復興募金につきましては、2001年9月20日から2004年8月までの累計で2,646,278,156円の募金が寄せられています。みなさまのご協力に感謝申し上げます。

子どもたちを守る！

打ち壊された夢——また学校に行けると思ったのに



ケネマのNGOで裁縫を習うファティマ。1歳の赤ん坊のママだ©UNICEF/Sierra Leone



フリータウンの街で卵を売る少年 ©UNICEF/Sierra Leone



Sierra Leone

シエラレオネの首都フリータウンから、国連のヘリコプターで熱帯雨林のジャングルを越え、空を飛ぶこと約1時間。かつて激しい内戦が繰り返されたシエラレオネ第3の都市、ケネマに到着します。銃痕の残る建物がまだ随所に見られるこの街で、私はアミナタに会いました。

現在、アミナタは16歳。フリータウン近郊の街で、11歳のときに反政府武力勢力（革命統一戦線、通称RUF）に誘拐され、炊事係として兵士とともに行動していました。2002年1月

の内戦終結宣言後、ユニセフなどの働きかけにより解放されたアミナタは、NGOの支援を受けて生き別れた家族を探し出すことができました。

内戦で既に父親を亡くしていたアミナタは、母親の実家のあるケネマ郊外の村に向かいました。見覚えのある風景。懐かしい匂い。そして、実の母親に再会する喜び。「うちに帰れるって思うと、すごく嬉しかった。これで夜も安心して眠れる。また学校にも行けるって思ったの」アミナタは言います。

ところが、母親はアミナタを学校に

行かせるどころか、毎日、早朝から夕暮れまで畑仕事を手伝わせたのです。父親という働き手を失ったアミナタの家庭にとっては、それは当然の成り行きだったのかも知れません。しかし、紛争後の平和な暮らしを夢見ていたアミナタにとっては、あまりにも過酷な現実でした。「本当は学校に行きたかったから、お母さんの所に戻ったんだけど、いつも慣れない畑仕事ばかりさせられて…。仕事がつらくて、それで家を逃げ出したんです」

こうして、行き場を失ったアミナタ

は、ケネマ市内の路上で生活するようになりしました。いわゆる、ストリート・チルドレンです。「私たちが街でアミナタを見つけた時、彼女の所持金はわずか1,000レオン（約0.36米ドル）でした。パンを3切れ買えば、それでお願いします。あとは、市場で物乞いをしたり、山の麓で取れるマンガローを食べて生き延びていたようです」

「ソーシャル・ワーカーのマリアマ・マンセレーは話します。「でも、彼女はラッキーでした。犯罪などに巻き込まれる前に、ユニセフの支援を受けたNGO

アミナタ：アミナタという名は仮称です。身元を明らかにしたくないという本人の希望を受けて、本文中ではアミナタという名称を用いました。